九州看護福祉大学紀要
Vol,8,No.1,125-133(2006)

ISSN 1344-7505

［ その他 ］

地域と学校で取り組む性教育

－「つなしの会」の地域活動を通して－

増田　安代[1]

【要　旨】本研究の目的は、平成13年度からT市の小学校の一部で取り組まれている4年生の児童を対象にした性教育を基軸とした「つなしの会」について把握し、基礎資料とすることである。聴取及びアンケート調査、平成16年と17年に実施された2小学校の児童の反応等から、以下のことが示唆された。1. 生物学的な性への理解、性への自己決定と責任、命のながれについて考える機会となっている。2. 家庭において親子が性について語りあう機会となっている。3. 両親や周囲の人々、生・命への感謝を深める機会となっている　4. 学校と地域との連携を図ることができ、子育て支援、地縁関係のあるまちづくりの一助となっている。

キーワード：小学校４年生　　つなしの会　　性教育　　地域との連携

【緒　言】

小学校の児童の殺傷事件、いじめ、自らの命を絶つ等の心を痛める事件がマスコミをにぎわせている。また性情報の氾濫のなかで性の商品化や性体験の低年齢化の急速な進行、性感染症の若者が急増している。経済や物質中心主義の現代の日本の貧しさの現れではないだろうか。そして、家庭や学校教育における「命の尊さと感謝」への教育の希薄さをも物語っているのではないだろうか。

かっての日本において、祖先を尊び、「性は生なり、性は命の流れなり」という考えが、三世代家族の中で自然に培われてきた。今や核家族化と環境破壊、都市化された生活のなかで、「性は生なり、性は命の流れなり」という「性」への考えが希薄になってきている。そのような現状のなかT市の数カ所の小学校において、地区の婦人会や市民団体、小学校の保護者、教員が連携し、10歳をひとつの節目として祝う会として「つなしの会」を実施している。人生には10年ごとの節があり、日本では生命や健康を祝う習慣があり、10歳は、第1回目の節の祝うという考えのもとに実施されているのがつなしの会である。

“つなしの会”の“つなし”とは、1歳から9歳までは、“ひとつ”“ふたつ”……“ここのつ”と“つ”がつくが、10歳から“つ”がつかなくなることから10歳をこうよんでいる。別名、10歳を二分の一成人式とも言っており、10歳からは思春期の入り口にたつということで、大人への扉を開くことへの自覚にむけての祝いということになる。

筆者は、性教育について、「生や命、人間関係としての在りようとしての性」と「生物学的な性とそのスキル」の2つが表裏一体となって展開されなければならないと考えている。そして、「生や命、人間関係としての在りようとしての性」を教授するに際に、生命の流れと命への感謝について考えさせていかなければならないとも考えている。筆者は、講師として招かれて、この地域と連動して実施されている“つなしの会”を知った。

“つなしの会”は、命の大切さとその連続性、生きる力と責任を育む性教育の実践である。性問題が低年齢化し、交友関係、親子関係、地縁関係が希薄化している折り、非常に重要な取り組みであると着目した。

学校では、2002年から総合的な学習が展開され、本格的な人材活用を検討している。そのような中、小学校において、地域と連携した健やかな子ども

[1] 九州看護福祉大学　看護福祉学部看護学科

の心身の育成を願う命の教育　「つなしの会」について、把握し普及していくことは重要と考えた。そこで、T 市における「つなしの会」の取り組みについて、実態を把握することにした。

本研究の目的は、地域と連携して実施されている「つなしの会」における性教育の実際について検討し、今後にむけての基礎資料として報告することである。

【方　法】

1. 聴取調査

1) 対象：　保健師 1 名、子どもがいきいき育つまちづくり部会長 1 名、小学校教員 2 名
2) 期間：平成 17 年 9 月 20 日～ 9 月 25 日
3) 方法：半構成的面接法、聴取内容は、「つなしの会」の経緯、児童・保護者・教員の反応、課題である。
4) 分析：聴取内容を「つなしの会」の経緯、反応、課題毎に整理し検討した。

2.　アンケート調査

1) 対象：T 市内の小学校 5 校
2) 期間：平成 18 年 3 月 20 日～ 4 月 10 日
3) 方法：アンケート調査（郵送法）
4) 内容：契機、単元、参加者、児童・保護者・担当教員の反応、教育的意味、課題
5) 各項目に記述された内容を整理し意義について検討した。

3. 平成 16 年、 17 年に実施された「つなしの会」の児童の反応の一部紹介

1)　平成 16 年 3 月 7 日、F 小学校 4 年生 32 名と保護者を対象、平成 17 年 1 月 26 日、A 小学校児童 43 名と保護者を対象に、実施した時の児童の感想文を紹介する。
2)　分析：感想文や主たる内容を抽出し児童の学びについて検討した。

4. 倫理的配慮

聴取者 4 名と 2 校の小学校教員へ本研究の目的と意図について説明し同意を得た。また、児童には、担任より説明してもらい同意を得た。5 校の小学校には、校長へアンケートの目的と意図について同意を得た。

【結果】 1.「つなしの会」に関する聴取内容

1)「つなしの会」の経緯

市町村における住民の健康づくりは行政だけで展開するのは限界がでてきた。そこで、平成 11 年市民との協働で市民座談会が立ち上がり、平成 12 年市民の声が盛り込まれた市民と行政の協働での T 市健康なまちづくり計画書が策定された。平成 13 年「自然と人との共生・環境を考える会」「すこやか福祉の町づくり部会」「子どもがいきいき育つまちづくり部会」の 3 つのグループに分かれて活動を開始した。そして、市民と行政のパートナーシップで健康なまちづくり計画の推進を図り現在にいたっている。

“つなしの祝い”の実施は、平成 12 年度、T 市健康なまちづくり市民座談会で Y 市の更正保護婦人会が実施している“つなしの祝い”の活動に見学・参加し感銘を受けた市民が、平成 13 年「子どもがいきいき育つまちづくり部会」で実施する計画をたてた。Y 市の場合は、日本文化の伝承という形をとっていたが、T 市の場合は、命の大切さや　生まれてきたことへ価値があるという考え方ができるような性教育を実施するべきだと考えた。一部の反対や父兄から抵抗感があるという声も聞かれたが、児童が納得するようなプログラムにし、教材を工夫したりして、「生・命と性について」考える機会にすることが大切なのではないかと説得した。そこで、子ども達に命への感謝と感激を伝えたいという主旨で性教育をベースにおきスタートした。平成 13 年度に 2 校の小学校で、その後、平成 14 年度に 2 校、　平成 15 年度に 1 校、平成 16 年度に 1 校と拡大し、継続的な取り組みを展開している。

2) 児童・保護者・教員の反応

児童サイドからは、いかに愛情に包まれて育てられてきたか確認でき、「命」や「性」に対して、素直に「大切なもの」として受け入れることができている。婦人会の方々や大学の先生等の参与により、「自分たちのためにこれだけの人が祝ってくれている」という感謝の気持ちから、学習への意欲付けになっているように思う。

保護者サイドからは、「今まで避けてきたけど子供と話さにやんとね」「子供とむきあえるよう

になった」「子供と性について話すきっかけとなったし、話しやすくなった」等のことである。

小学校の教員サイドからは、「専門家の支援を受けて気持ちが軽くなった。子供達としっかりむきあいながら性教育へ取り組んでいきたい」「保護者と性教育について話せるいい機会がもてるようになった」「保護者の参加により、学校現場の取り組みへの関心や理解も深まってきた」「地域の方々（婦人会の方等）の協力は、開かれた学校づくりの一助になっている」等のことである。

3) 今後の課題

「つなしの会」は、主に4年生の担任が実施している。毎年4年生の担任は変わるので、その年毎にスタイルが大きく変わることもありうる。また、学校により取り組みが様々である。学校としての共通理解と一貫した取り組みが必要である。

2. アンケート調査の結果

5小学校のアンケートの結果については、表1参照。アンケートに協力を得たのは、担当した教員や養護教諭からである。なお、A小学校における取り組みの概要が添付したあったので紹介する。

A小学校における「つなしの会」の取り組み

主題名：10才を祝おう（つなしの会・1／2成人式）

主題のねらい：10歳という節目の時期に際し、これまでの自分（出生から今日まで）を振り返る。命の尊さや周囲の人々に対する感謝の気持ちを確認できるようにする。子どもから思春期になる大きな節目の時期に、子どもたちにもらった命の尊さや大切さを教え、次の生命につなぐ役割があることを自覚させる。また、親の思い、地域の方々の思いに触れ、自他を大切にしようとする気持ち（セルフエスティーム）を高める。児童相互でこれまでの互いの成長を認め合い、将来についての希望や夢が持てるような場とする。

展開の大要

1. 一人ひとりのこれまでの十年間を振り返る。（つなしの記録作成）
2. ゲストティーチャー（地域の婦人会の方・講師）を紹介する。
3. ゲストティーチャーの方の講話を聞く。（講話の内容については、学級の実態を踏まえて事前に指導者が打ち合わせておく。）
4. 児童とゲストティーチャーの意見交換をする
5. ゲストティーチャーの方へ謝辞を述べる。
6. 講話を受けて、補足などあれば補い、まとめをする。

「つなしの会」の経緯：数年前から四年生を対象につなしの会が行われている。会は学校と地域の婦人会との連携の中で行う。子どもたちの成長を祝うことや伝統文化の継承を狙っている。まず、日程や内容等の計画を婦人会長さんと協議した。婦人会で招いていただく講師についての検討も進めた。婦人会には、一人ひとりの記念写真を撮っていただいたり、地域に伝わる伝統の手作り饅頭を作っていただいたりした。学級では、演題書きや司会、お礼の言葉等、会を開くために必要なことを話合い、分担して準備を進めていった。

「つなしの会」開催までの期間中に、自分のこれまでの成長の様子を調べ、壁新聞にまとめる学習を行った。つなしの会の参加者に知らせるという目的意識を持たせた。まず、誕生からこれまでの自分の成長の様子を取材した。そして一人ひとり、写真を効果的に使う等、表現を工夫しながら壁新聞を書いた。つなしの会当日は会場の壁面に掲示し、参加者にも読んでいただいた。

成果：①家庭や地域との連携を生かした取り組みのメリットがあった。新聞作りでは、事実だけでなく成長によせる家族の思いを知ることができた。地域の人の体験談や深い知識にふれる事は子どもたちへのよい刺激となり、人間形成に影響を与えたと思われる。また、地域社会を意識することにより、社会へと眼を向けつながっていこうとするきかっけにもなっていくであろう。

②つなしの会では、セルフエスティームの育成を大きな目標の一つとしていた。自分の成長が認められ祝福を受けたということや、命をつないでいるという自己の生の意味を考えたことには、大きな価値があったようだ。自己の肯定感が増すことは周りの人を大切にすることにもつながる。豊かな人間性や社会性の育成に向かっていくであろう。

③社会性のスキルを磨くことができた。司会やお礼の言葉など役割分担を児童で話し合い取り組ん

でいった。いろいろな人と出会うこと、どう対応していけばいいのか、どう気持ちを伝え合っていけばいいのか、それらを考える貴重な機会となった。礼の言葉など役割分担を児童で話し合い取り組んでいった。いろいろな人と出会うこと、どう対応していけばいいのか、どう気持ちを伝え合っていけばいいのか、それらを考える貴重な機会となった。

3. 平成 16 年、17 年に実施された 2 校の紹介とその時の児童の反応

1) F 小学校での「つなしの会」の児童の反応

平成 16 年 3 月 7 日、F 小学校 4 年生 32 名と保護者を対象に、精神保健センター保健師 1 名・開業助産師 1 名・T 地区母子保健推進員 1 名で講義を実施した。その時の児童の感想文の一部を紹介する。

児童の反応

・私は、3kg の赤ちゃんをだっこして、こんなに重いんだと思いました。……私たちにできることは、命を大切にすることです。わけは、お母さんが命がけで私を産んでくれたし、お父さんも、私が生まれる時、ずっと立ち会ってくれて命という大切なものをバトンタッチしてくれたから、私も命を大切にしてバトンタッチしたいからです。私たちは、たくさんの人に見守られて支えられて育ってきました。これからも、もっとたくさんの人に助けられると思います。本当にありがとうございました。

・ぼくが思ったことは、お母さんがとても痛い思いをして、ぼくを生んでくれたことです。それなのにぼくは、「お母さんがせっかく産んでくれたのに、『やだ　やだ』と言ってしまった」と思って反省しました。でもバトンタッチしてもらった命は、ぼくが大人になってまたバトンタッチして、またそのバトンタッチして、またそのバトンタッチされた命を大切にして欲しいと思いました。

・赤ちゃんを抱っこして「重い」と思いました。私が赤ちゃんの時「こんなに重いんのをいつも抱っこしてたんだー」と思いました。自分でできることは、1 つしかない命を大切にすることです。もちろん人の命もです。あと家族に感謝したいです。等

2) A 小学校での「つなしの会」の児童の反応

平成 17 年 1 月 26 日、A 小学校児童 43 名と保護者を対象に、I 地区の婦人会長と筆者とで講義を実施した。なお、I 地区の婦人会の人々も参加した。

講義の一部を紹介すると、性交と生命誕生について、自己の誕生との関連で両親の愛の結実である事、脈々と続く次世代への命の営みである事を、ご先祖様との関連で「ヌチヌグスージのいのちのまつり」の絵本を通して考えさせた。その後、各グループでご先祖様づくりの作業に入り、作成したご先祖さまをグループ毎に発表し教室に貼った。

“ヌチヌグスージ”とは沖縄の方言で、“いのちのお祝い・いのちのお祭り”という意味である。沖縄では、春になると親戚中がお墓に集まって、サンシンをひいたり、歌ったり、踊ったりして、ご先祖様に「ありがとう」を伝える習わしがある。コウちゃんという男の子が、この機会を得ご先祖様から脈々と続いている“いのち”の不思議さを通して、自分の“いのち”の重みを実感する絵本である。[1)]

その時の児童の感想文の一部を紹介する。

児童の反応

・先生、こんにちわ。「つなしの会」の時のお話とても良かったです。特に、人間には三つの世界があることにおどろきました。死後も世界があるというのは初めて知りました。また、お話を聞かせてくださいね。

・つなしの会の時は、ありがとうございました。一人でも、じいちゃん、ばあちゃん、ひいじいちゃん、ひいばあちゃんがいないと、わたしは、産まれなかったということが心にのこりました。また、お話をしにきてください。

・私は、先生の話を聞いて、しそんのお話しが一番心に残りました。しそんは、私のひーじいちゃんや、ひーばあちゃんが、生きてお母さんとお父さんがけっこんして私が生まれたということが心に残りました。また、先生の話を聞きたいです。

・つなしの会で、赤ちゃんの産まれ方などいろいろおしえてくださってありがとうございます。あと、しそんをつなぐやつがおもしろかったです。

本当にありがとうございました。
・つなしの会の時、男と女の体のことなどの話をしてくれてありがとうございます。第二次性徴の話などは、ちゃんとこまかくおしえてくれてありがとうございます。男と女の体のちがうところもいっぱい見つけました。本当にありがとうございました。
・わたしは、体のことをあまりしらなかったので、先生のおかげで自分の体のことがわかりました。ありがとうございました。
・わたしは、体の中があんなふうになるとはしりませんでした。とっても勉強になりました。ありがとうございます。
・体の話で、思ったことは、体は、男の子と女の子は、体のちがうところがいっぱいあるなと思いました。すごくべんきょうできました。おもしろくいったり、本当おもしろい話でした。本当にありがとうございました。
・男の子と女の子のちがいをいっぱい教えてくださってありがとうございました。とってもいいお勉強になりました。私の知らなかったことをたくさん教えてもらったからです。本当にありがとうございました。
・つなしの会にわざわざきてくださってありがとうございました。ぼくは第二次性徴が 10 才ぐらいだとはおもいませんでした。ありがとうございました。
・私は、ほけんのことなどはあまりきょうみなどは、ありませんでした。でも、先生のことを聞いて、大じなことだと思いました。

【考 察】

T 市の「つなしの会」では、性教育がベースとなっており、現在半数以上の小学校で実施されている。平成 13 年度から小学校と連携を図りながら、保健センターや「子どもがいきいき育つまちづくり部会」の部会長らが、地域の人材を紹介したり(この中には大学の教官も含まれている)、「つなしの会」の発展にむけて助力している。かっては、先祖を尊び、生あるもの・生きとし生きるものとして、自然や物を大切にし、命や日々の恵みへの感謝を、家族や地域の人々、学校で教えてきた。しかし、最近の傾向として、三世代家族が少なくなり家族関係の希薄化から、大家族のなかで伝承されてきたものが日々の生活から消えていったり、地縁関係や学校との連携も希薄となっている。そして、命の教育や性教育は学校へすべておまかせの感があり、学校において戸惑がみられる。また、自分達の脈々と続いてきた命、命のルーツを知り、自分が今存在していることへの責任と価値について、家庭や地域で子どもと共に考える機会がなくなっている。そうしたなかで、市民座談会から始まった健康なまちづくり委員会の３部会のひとつである「子どもがいきいき育つまちづくり部会」の取り組みは非常に重要な意味をもつ。それは、「つなしの会」を実施することで、地域、家庭、学校が、ひとつになって、子どもの性への健全育成を願った取り組みにむけて絆づくりの起点となっているからである。

そこで、「つなしの会」がどのような意味をもつのかについて、調査結果及び児童の感想文から検討し以下のようなことがわかった。①児童にとって、地域の人々や親や先生や周囲のすべての人の思いの中にあること、自己の心身の変化や性への正しい知識の習得、性は生であり生きていくことのへの責任について考える機会になっている。②保護者も参加することで、家庭における親子の絆の見直しや自然体で性を子どもと語りあえるきっかけ作りとなっている。③学校・教員が、“命の教育”の質の面で取り組み易い環境提供への一助や考える機会となっている。

このような「つなしの会」の取り組みは、かっての大家族や地域のなかで伝承されてきた機能の肩代わりとしての役割を果たしていることが伺える。このことは、ある意味では、熱意ある住民と教員、学校との一体となった子どもの健全育成と子育て支援への地域活動にむけてのネットワーク化と言えるのではないだろうか。つまり、地域住民、学校関係者、保護者、保健センター、大学が、児童の幸せを願い、共に支援し見守っていくパートナーシップとしての関係を作る基盤整備となっていると言えるのではないだろうか。また、「つなしの会」を性問題への予防介入教育プログラム

とも捉えることができ、学校、家庭、地域が共通認識をもつことができる場となっているとも言える。そして、性に関する内容が地域でオープンに語られるような風土ができあがれば、保健センターのねらいとする性教育の取り組みも容易になってくるのではないだろうか。

なお、兵庫県財団法人21世紀ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所における2002年「青少年の性意識と性行動に関する調査研究報告」の調査結果からの提言として、「友人関係・家族関係、また学校が楽しくないと思う若者は、退屈感、享楽感、虚無感と徒労感が強い。このような価値観を持つ若者は、セックスを『快楽』『ストレス解消』『征服感を満たすもの』と位置づけし、早い年齢でセックスを体験し、また多くの人と性交渉をしている。さらに、このような価値感を持つ者ほど、出会い系サイトを利用し、また援助交際に走る者が多い。」と述べている。このことは、家庭や学校において、性・生を安心してオープンに語れる環境の大切さを意味していると考える。そうした時、「つなしの会」は、家庭や学校において、性をオープンに語り、受け止め支援する体制づくりにもなっていることが伺える。小学校の時から、このような環境のなかで育っていけば、中学校、高等学校なっても語り合える関係の中にあることが推察され、性・生（命の連続性としての性）の価値意識を持つ上での重要な取り組みとも言える。

ところで、筆者の体験もふまえて外来講師になった場合、学校により取り組む方法や担当する担任の取り組む単元も異なる為、担任の先生との充分な打ち合わせは非常に重要となってくる。「つなしの会」での外来講師の講義は、“点”である。しかし、外来講師の「性教育」への長い思いの中では、線の中の点である。そして、小学校の担任サイドの教育展開のプロセスのうえでも線の中の“点”である。外来講師と担任との「つなしの会」という接点での“点”を通して、つまり、性教育の専門職（大学も含む）や地域と学校が連携していき、互いに影響しあい、どのような“線”にしていくかについて充分検討される必要がある。このような取り組みの積み重ねこそが、相互理解と連携に繋がっていくことから、地域の中で見守られて、子どもがいかに健やかに育ち、人に優しい大人になれるかということと非常に関連してくるのではないだろうか。また、小学校の教員にとっての性教育への負担軽減につながり、「つなしの会」への取り組みが拡大されていくことにつながっていくのではないだろうか。

今回「つなしの会」のことを筆者は、講師を依頼され初めて知った訳である。知人から平成16年度に他の小学校で実施された写真集や子ども達の感想文をT市の保健センターで展示してあるという情報を得た。T市の保健センターに訪れた住民へ「つなしの会」の取り組みを知らせている訳であるが、このような広報活動も広く取り組みを推進し啓発していく上では大切であると考える。今後、市政だよりや広報に提示されることも必要であると考える。

今後の課題として、一つには、小学校において4年生の担任サイドで「つなしの会」は実施されており、取り扱われる単元も様々であることから、養護教諭も巻き込んだ学校としての一貫した取り組みが必要になってくる。今後、T市内での「つなしの会」や「10歳を祝おうー1/2成人式」への取り組みを教育委員会と共同で調査し、実態把握に努める必要がある。そして、「つなしの会」は、市全体で取り組まれていくような検討が、今後は必要になってくるものと考える。二つには、「つなしの会」はライフサイクルにおいて、義務教育の要となる取り組みである。生涯教育の視点にたった時、保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学と各要における一貫した性教育プログラムの作成と実践が必要であると考える。各現場の教員同士が、一緒になって「　性は生なり、性は命の流れなり」という概念と態度育成にむけて検討できる場や行政の助成、大学の関与、「子どもがいきいき育つまちづくり部会」とのタイアップ等が検討される必要がある。　家庭や地域、学校、行政がどのように連携していくかと、幼児期から地域ぐるみで取り組んでいくような体制の整備と拡充が、早急に必要となってくるのではないだろうか。

そうして初めて、性の低年齢化や性の乱れ、学校の崩壊等が言われている折り、自己の性や自・

他の命を大切にし、むやみやたらな殺生をせず、他者にやさしくできるような子どもの育成につながっていくのではないだろうか。そして、それがひいては人に優しい地縁関係のある大人社会が生まれ、高齢者や障害者、人にやさしい町づくりの一助にもなるのではないだろうか。

【結論】

性教育を基軸にした「つなしの会」の実施の実態を通して以下のことが示唆された。

1. 命の大切さや第二次性徴、出産と育児、男女や友達を尊重することの大切さを学んでいる。
2. つなしの意味を知り祝われることを通して、性への自己決定と責任、命への感謝等の性の在り方について考える機会となっている。
3. 性教育をベースにおくことで、家庭において親子が性について語りあう機会となっている。
4. 「つなしの会」の実施を通して、地域、保護者、学校との連携を図ることができ、健全育成にむけての子育て支援、地縁関係のあるまちづくりの一助となっている。

【謝 辞】

お忙しいなか本研究にご協力いただきました皆様に深謝いたします。

【参考文献】

1) 草場一壽：ヌチヌグスージ「いのちのまつり」．今心書房．佐賀．2004
2) 兵庫県財団法人 21 世紀ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所：青少年の性意識と性行動に関する調査研究報告．　教育アンケート調査年鑑．創育社．2002；38
3) 松本清一監修　高村寿子編著：性の自己決定能力を育てるピアカウンセリング．東京．小学館．2003
4) 三木義彦：内観法における愛について．現代のエスプリ No202.5. 東京．1984
5) 石井光：１週間で自己変革「内観法」の驚異．講談社．東京．1999
6) 尾木直樹：学校は再生できるか．東京．日本放送協会．2000
7) 徳田良仁・小林司編．人間の心と性科学㈱．星和書店．東京．1980
8) 内観研究　Vol.10,　No.1　日本内観学会．2004
9) 西垣戸勝：性教育は、いま．岩波新書．東京．1993
10) 日本性教育協会解説書：性教育指導要項解説書．小学館．東京
11) 松本清一監修：性の自己決定能力を育てるピアカウンセリング．小学館．東京．2003
12) 間宮武・松本清一監修：性教育マニュアル　性教育の理論と実践．大成出版社．東京．
13) 村瀬学：「いのち」論のひろげ．洋泉社．東京．1005
14) 山崎広光：〈いのち〉論のエチカー生と死についての 23 編―．北樹出版．東京．1997　　．
15) 山本直英監修：せっくすのえほん．子どもの未来社．東京．2003
16) 竹下哲：人のいのち．東本願寺出版部．京都．1995
17) 永畑道子：ほんとうの学校を求めて．講談社現代新書．東京．1986
18) 石井光　編著：子どもが優しくなる秘けつ　ー３つの質問（内観）で心を育む．　東京．　教育出版 2003
19) 皆川興栄：総合的学習でするライフスキルトレーニング．東京．明治図書．2001
20) シルバーナ Q. モンタナーロ：いのちのひみつ．東京．KTC 中央出版．2004
21) 山本直英：せっくすのえほん．東京．子どもの未来社．2003
22) 河合隼雄：父親の力母親の力「イエ」をて「家」に帰る．東京．講談社．2004

表１．５小学校における「つなしの会」への取り組み状況

項目		Ａ小学校	Ｂ小学校	Ｃ小学校	Ｄ小学校	Ｅ小学校
契機		地域の婦人会と市民座談会	市民座談会の申し出による	市民座談会の申し出による	2002年から総合的な学習が始まったので	国語の教材にあったので
単元名		学級活動：命をつなぐ	保健体育：大人に近づく身体　　学級活動：男女仲良く	総合的な学習：ハートフル（性教育）	総合的な学習 年度では、国語10歳を祝う	国語：1/2成人式 総合的な学習
参加者		４年生、児童の保護者、地域の婦人会、教職員	４年生児童・保護者、市民座談会、（講演会は、5・6年生の児童と保護者）教職員	4年生児童・保護者、5・6年生児童、市民座談会、全職員	４年生児童・保護者、教職員	４年生の児童・祖父母、教職員
反応	児童	感謝の言葉、命の大切さ、父母尾への感謝、暖かい心を感じうれしかった、将来の希望、仲間の良さ　等	命の大切がわかったので大切にしたい、命は繋がっている、選ばれた命である　等	親から自分が大切にされていることがわかって、感激していた。	自分の誕生や自分の存在をうれしく思う、自分を取り囲む人々への感謝　等	収穫したサツマイモの料理の会食を交えた発表会だったので楽しんでやれた。
	保護者	命について考える機会となっており、子どもの成長が確認できた。	子どもや保護者にとってついて命の大切さを勉強する機会であり、市民座談会の方に感謝する。	子どもの10年間をふり返ることができ、手紙のやりとりで心が通じあえた。他の家庭のことも知ることができた。	成長した我が子をうれしく思う（心や体とともに）	子ども達の考えや思いを聞いたりテロ売り手料理を食べたりしとても良かった。
	担当教員	自分の10年間の自己のふり返りや命の尊さの理解が図られ、親・周囲への感謝がでてきている。　成長によせる保護者の思いを知る機会となった。	2月は、性教育の期間だったので、導入としてとてもよかった。これを機に性教育の指導をおこなった。	終了後親子で手紙の交流をさせた。手紙を読みあい感激している姿に感激した。子ども達は、一生懸命手紙で親にしか話せないことを書き、自分の振り返りができとても良かった。	児童や保護者の感動する姿に感動する。	発表会に至るまでの学習で、自分のいふり返えったり、将来をみつめることができ良かった。
教育的意味		家庭・地域と共に創っていく授業であり、専門知識や地域の思いにふれることができる。	命の大切さや両親だけでなく地域やT市の方、地域の方から自分達は大切にされていることを実感する機会となり、自尊感情の高まりがみられた。	生まれてきたこと、自他の命を大切にしようという気持ちの育成や親子で話すいい機会になっている。	心と体の成長を祝う会であり、子どもが自分のことを深く考える時間だと思う。そこに至るまでの学習課程が大切な時間であり、担任の思いが深く影響する。	学習が進むにつれ、深まりや広がりはでてくる。目標をしっかりさせておかないと活動が広がり、時間の増大やまとめの苦労等の問題がでてくる。
課題		単発で終わらせないことや　日頃から家庭や地域との連携が必要である。また、地域の人的資源の把握と共に、実施に際しては連絡・調整の充分な時間が必要である。	意義ある講演やお祝いなので、広報（PR）が必要、保護者や地域の方々のにももっと参加してもらいたい。	全部の保護者へ必ず参加してもらう為に２ヶ月前から参加確認をとった。地域で見守られていることを実感できる小さい時からの地域性が必要で、今回のような学校の取り組みだけでいいのだろうか。	自分探しをする学習課程を大切にしたいので、学校主体の方が良い。子どもが成長した姿を見て頂く、地域の人々がそれを祝い見守っていく、相互の会話ができる会にしていくと継続できるのではないだろうか。	地域の良さをより多く発見し、子ども達に体得させていくことが必要である。

The Journal of Kyushu University
of Nursing and Social Welfare
Vol. 8, No. 1, 125-133 (2006)

ISSN 1344-7505

[Other]

Sex Education at School and in Communities

－through the community program at “gtsunashi-no-kai”－

Yasuyo Masuda

Kyushu University of Nursing and Social Welfare Tamana,
Kumamoto 865-0062, Japan

【Abstract】

This study aimed to understand and collect the basic data for the “tsunashi-no-kai” (group of 10-year-olds), the community program to teach sex education which has been conducted at some primary schools in “T” City since 2001. The interview and questionnaire surveys, and reactions of children at two primary schools where the program was conducted in 2004 and 2005, showed the following results. 1) The “tsunashi-no-kai” provided opportunities to reflect upon sex in a biological context, self-determination and self-responsibility on sex, and thread of life. 2) The activities triggered a family talk on sex at home. 3) The program helped deepen the gratitude for parents, people around them, and life. 4) The program encouraged the alliance between school and community, contributing to creating a community with child support and local networks.

Key words **: 10-year-olds, “tsunashi-no-kai”, sex education, alliance with community**